

阿刀田 高の
楽しい古事記

阿刀田 高



角川書店

江苏工业学院图书馆
藏书章

阿刀田高の
楽しい古事記
阿刀田高



阿刀田高の 楽しい古事記



2000年5月30日 初版発行

2000年10月25日 三版発行

あとうだ たかし
阿刀田 高

発行者／角川歴彦

発行所／株式会社角川書店

東京都千代田区富士見2-13-3 〒102-8177 振替 00130-9-195208

TEL 営業03-3238-8521 編集03-3238-8451

印刷所／横山印刷株式会社

製本所／株式会社鈴木製本所

落丁・乱丁本はご面倒でも小社営業部受注センター読者係宛
にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

©Takashi Atoda 2000 Printed in Japan

ISBN4-04-884128-9 C0021

¥1500～

阿刀田高の楽しい古事記

目次

国の始まり	5
——イザナギ・イザナミによる建国	
岩戸の舞	26
——アマテラス大御神、岩戸に隠れる	
神々の恋	48
——八俣の大蛇退治と因幡の白兔	
領土問題	71
——オオクニヌシの治世	
山彦海彦	92
——兄弟の争い	
まぼろしの船出	113
——神武天皇の東征	

辛酉しんゆうにご用心

——崇神・垂仁天皇の治世

悲劇の人

——ヤマトタケル伝説

皇后は戦う

——仲哀・応神天皇の治世

煙立つ見ゆ

——仁徳天皇の権勢

殺して歌って交わって

——雄略天皇の君臨

女帝で終わる旅

——返り咲いた顕宗・仁賢天皇

248

228

203

180

157

136

装画 石丸千里
装丁 松岡史恵

国の始まり

——イザナギ・イザナミによる建国

まず初めにイザナギの命、イザナミの命、二人の神様があつた。男神と女神である。神様は通常一柱、二柱と呼ぶものだが、それでは親しみにくい。人間くさい神々に登場してほしく、ここでは一人、二人、三人と数えよう。お許しいただきたい。

この二人より先に五神と六代、都合十七人の神々の名があるのだが、いちいち掲げるのはややこしい。古典はおもしろい部分から入門するのが私のモットーだ。それゆえに他の六代は省略。イザナギの命、イザナミの命のエピソードがひとときわ内容が豊富で、肝要である。

さて、男女二人の神様はドロドロと漂っている混沌状態を「固めて国を造れ」と命じられ、天の浮橋という天と地を結ぶ階段に立つて、天の沼矛という矛をさながら長いマドラーのようにグルグルまわして、ポタリ、しずくをしたたり落として、これがオノゴロ島となつた。国造りの拠点を得たが、それが今日のどこかはわからない。

が、それはともかく、二人はオノゴロ島に降り立って柱を建て、建て終わつたところで有名な問答を交わしあう。原文に近い形で引用するが、きつと一度くらいは小耳に挟んだことがあるだろう。

「汝が身はいかに成れる？」

「吾が身は成り成りて、成り合わぬところ一処あり」

「我が身は成り成りて、成り余れるところ一処あり。吾が身の成り余れる処を、汝が身の成り合わぬ処に刺し塞ぎて、国生みなさんと思うはいかに？」

「しか善けむ」

と、直截なセックス描写なのだが格調は高い。

——それにしても、刺し塞ぎて、なんて言っていていいのかなあ——

若い頃に読んでドキンとしたものだった。

あるジョークによれば、太古、皮袋を縫って人体を創るとき、半々に切るべき縫い糸を六・四に切ってしまった。長い糸で縫い終わると糸が少し余ってしまった。わきの皮膚を少しつまんでグルグルグル、糸で巻いて棒を作った。一方、短い糸では縫いきれず、穴が残った。これが男女の誕生であったとか。イザナギの命、イザナミの命も神様ながら、二人の会話にはこのジョークを髣髴させるところがある。

イザナミの命から「しか善けむ」つまり「いいわよ」と快諾をもらったイザナギの命はいま建てた柱を左からまわり、イザナミの命は右からまわり、両側からめぐりあって、

「あなた、いい男ね」

「あなたもいい女だなあ」

褒めあってまぐわい、国造りを始めたが、生まれた子も生まれた島もあまり様子がよろしく

ない。

——なぜかしら——

天意を尋ねると「女が先にものを言ったのがよくない」とのこと。いや、いや、いや、ウー
マン・パワーから苦情が出そうだが、私が言うのではない。古事記にそう書いてあるのだ。

そこでイザナギの命、イザナミの命は柱の前に戻ってもう一回まわり直し、

「あなた、いい女だなあ」

「あなたこそいい男ね」

順序を変えて褒めあい、まぐわって今度はりっぱな子を生んだ。子と言っても初めは島々である。まず淡路島、それから四国、隠岐、九州、壱岐、対馬、佐渡、そして最後に本州、数えて八つ、日本の国を大八島と呼ぶのはこのためである。

ご存知、柴又の寅さんは「物の始まりが一ならば国の始まりが大和の国、島の始まりが淡路島」と言うけれど、香具師の口上もばかにはならない。たいていのものは一から始まるし、日本国の始まりが大和の国だというのは大和朝廷を国の基とする皇国史観の原点、古事記の思想そのものであり、島の始まりが淡路島というのは国造りの冒頭に掲げられている記述なのである。

それにしても、この八つの島の並べ方は、どことなくチグハグだ。大きさがちがいきる。北海道や沖縄がないのは（遠隔の地だから）ともかく、壱岐を挙げるなら天草島、平戸島、ほかに挙げるべき島があるだろう。が、それは地図を見慣れた現代人の感覚というもの。古代

人は島々の大きさを充分には知らなかつただろう。大和の国からながめて淡路島は外せない。四国と九州はやつぱり大きい。隠岐、宍岐、対馬は大陸からの文化伝来の拠点として知られていたにちがいない。佐渡は、遠い遠い海上の孤島であつたらう。最後に自らが立つ本州を置いて（これが一番大きそうだと知つていた）大八州にまとめたのではあるまいか。

このあと落穂拾いでもするように吉備の児島、小豆島、大島、姫島、知訶の島、両児島の六島を造つて島造りは完了するが、吉備の児島は岡山県の児島半島で、島ではない。正確な地図がなければ（海上からながめれば）半島と島の区別はつけにくい。小豆島は瀬戸内海の小豆島（大島は山口県の屋代島（あるいは愛媛県の大三島））姫島は大分県北端の姫島、知訶の島は五島列島、両児島は特定できない。往時の人々が地名を聞いて、どのように海図を頭に描いていたか、その一端を垣間見ることができると興味深い。

島々を造り終えたところで、イザナミの命は、さまざまな神々を産み始める。力を象徴する神をかわりに住居の神、海の神、河の神、水の神、風の神、木の神、山の神、野の神、土の神、霧の神、谷の神、船の神、食物の神……やがて火の神を産んだときイザナミの命は下腹の大切な部分を大火傷、七転八倒の苦しみの中でなおも神々を産んだが、ついに命を落としてしまった。

イザナギの命は、

「たつた一人の火の神のために、最愛の妻を失つてしまふとは、なんたる悲惨」

と嘆き悲しみ、泣く泣くイザナミの命を出雲と伯耆の国境にある比婆山に葬るかたわら手に

もった長い剣で、

「こいつ、許せない！」

火の神の首を斬り落とした。剣は十拳劍、刀身が握り拳を十並べた長さがあるからだ。

このとき流した涙から、はたまた剣の血糊やしたたりから、さらには殺された火の神の体からも十数神が誕生し、それぞれ名前もあるし役割もあるのだが、ここではとりあえず、

——いろんなところから、いろんな神様が誕生するものなんだなあ——
と、古事記の多神性を感じ取って先へ進むこととしよう。

朝九時過ぎタクシーを頼んで宮崎市内のホテルを出発した。目的は霧島山の観光だが、

「その前に東霧島神社へ立ち寄ってください」

と運転手に頼んだ。

「東霧島神社？」

「東と書いてツマと読むらしい」

「ああ、霧島東神社ね」

「それとはちがうと思います。霧島東神社つてのは御池の近くでしょ」

「ええ」

「それじゃなく高崎町にあつて、駅で言うが高崎新田と東高崎の間くらい……」
と、私はガイドブックと地図を交互に見ながら説得した。

もとより知ったところではない。知らないから見に行くのである。運転手に言えばすぐにわかるものと思っていたが目論み^{もくろみ}がはずれた。なにしろ宮崎県は神々の故里だから神社はたくさんある。よほど周辺の地理に明るい運転手でなければ知らない名所もちらほらあるらしい。

運転手が無線で営業所に連絡を取り、

「わかりましたア」

と頬笑^{ほほえ}みただけれど、その実、そう簡単ではなかった。

「なぜ東と書いてツマと読むのかな」

「さあ」

所在地さえわからない人には無理な質問だったろう。

高速道路を高原町で降りて東へ戻る感じ。一度矢印のついた案内板を見たのでまちがいはなからうと思ったが、そこからまた走ること、走ること、いっこうに次の案内板が現われない。

「通り過ぎたのかなあ」

「聞いてみます」

が、尋ねようにも開いている店一つない。家並は続いているのだが人の姿がさっぱり見えない。ようやく花の手入れをしている婦人を見つけて車を止めると、

「この先です」

通り過ぎてはいなかった。

分かれ道を右に曲がり、また案内板を見つけて、

——もう近い——

と思つたが、素人のあきはかき、それからまたまちがえて丘を一周し、

「この案内板、紛わしいなあ」

「こっちの道ですね」

さらにしばらく走つて、ようやく東霧島神社へたどりついた。由緒はあるのだが観光客の訪ねる神社ではないらしい。地元の人を知つていればそれでよいのだ。

——私も粹狂だな——

と苦笑しながら境内へ入つた。

訪ねた理由はただ一つ、ここに裂石きげいしがあるから……。

イザナミの命が火の神を産んだとき体に……正確には陰部に大火傷を負つた。それがもとで死んでしまう。イザナギの命がおおいに怒つて、

「お前のせいだ！」

と、火の神を斬り殺した。その事情はすでに述べた。

斬られた火の神は石となつて、この地に残り、それが裂石の縁起由来である。石は三つに斬られ、一つは宮崎市の新別府川のほとりまで飛んだとか。直線距離を計つても約四十キロメートル。

——よくも、まあ、飛んだものだなあ——
と思つたが、

——待てよ、待てよ——

イザナミの命の亡骸^{なきがら}を埋めたのが出雲と伯耆の境。現在の広島県の北東部、立烏帽子山^{たてえぼし}のすそにある比婆山がその地だと伝承されている。さらに日本書紀によれば、イザナミの命を葬つたのはそこではなく紀伊国熊野の有馬村だと言う。これは三重県の熊野市だ。どちらにせよ宮崎からはるか遠く離れて四十キロどころの騒ぎではない。

まあ、まあ、まあ、神話の世界はスケールが大きい。とりわけ日向^{ひゅうが}、出雲、熊野の三地域は関わりが深い。なにかしら時空を超えて伝承のつながりがあるらしい。さまざまな学説があるけれど、素人にはよくわからない。ありのままをながめて旅をすることにしよう。

さて、東霧島神社の裂石だが、境内に入り、社務所の前を過ぎると本殿に参拝するより先に、ありました、ありました、小暗い繁みの下に鳥居を立て注連繩^{しづなわ}を巻き、高さ一メートルあまり、横幅二メートル弱、奥行きはもう少し長く、その奥のところではザックリと斬られて二つに分かれています。割れたというより、鋭利な刃物で斬られたような切り口を露呈している。

もともとこういう石だったのか。それともなにかの目的で切られたのか。だったら、

——だが、なんのために——

と考えたが……あははは、それはイザナギの命が火の神を斬ったからでしょう。それを見るために私はわざわざ遠路はるばるここまで訪ねてきたのだった。

大石は浅い水の中に置かれていて清水が流れ込んでいる。それはイザナギの命の涙であり、旱魃^{かんばつ}のときにはこの石に水を一滴注げばそれが呼び水となつてたちまち雨が降るそう。雨乞

いの神石として信仰を集めて来たのだと言う。

私としてはこの先もう少し旅を続けるつもりだったから雨降りはありません。その旨を心で唱え一礼して本堂へと向かった。

小高い丘を登って参拝したあと社務所で由来を記した小冊子をいただき、ついでに、
「なぜ東がツマなのですか」

と尋ねれば、

「この地方の言葉みたいですねえ」

とのこと。それ以上は要領を得なかった。

話は飛ぶけれど西表島は、なぜ西をイリと読むのか。ずっと疑問を抱いていたのだが、あるとき、西表島よりさらに西にある与那国島よなぐにじまに行つて理由がわかった。さつまいもを横に置いたような与那国島では東の先端が東崎あがりさき、西の先端が西崎いりさき、太陽の出没に因んでいるのだろう。それゆえに西がイリなのだと思当をつけたが、東霧島のツマはなんなのか。方言にしてもいわく因縁がありそうだ。心に留めておこう。

タクシーに戻って走らせ、小冊子をパラパラとめくっていると、

「えっ」

と声をあげてしまった。

十拳剣もこの神社に所蔵されているのだとか。先にも触れたがこれはイザナギの命が火の神を斬つたときの長い剣である。パンフレットには写真まで載っている。

私の事前調査では、そんなこと、どこにも記されてなかった。裂石のことを書いておきながら、それを斬った刀について触れてないのは……どうも釈然としない。

——車を返そうかな——

と思つたが、

——まあいいか——

あえてこの秘宝を探查する必要もあるまい。私としては裂石一つ見れば満足であつた。

——あんな大きな石を斬つて、かけらが四十キロも遠くまで飛んで行つたなんて……よほどイザナギの命の怒りが激しかったんだらうな——

フィクションを信じた古代人の心理を感じることができれば、それで私はうれしいのである。

話を古事記そのものに戻して……最愛の妻に死なれたイザナギの命は悲しくて悲しくてたまらない。もう一度イザナミの命に会いたいと思ひ黄泉の国へと降りて行つた。

死者の住む宮殿の扉の前まで行つて、

「いとしい人よ、あなたと一緒に始めた国造りもまだ終わっていないのにどうして死んでしまつたのだ！ どうか帰つて来ておくれ」

と必死になつて嘆願した。

すると闇の中からイザナミの命の声が聞こえる。